様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年　６月　８日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2009～2111
課題番号：２１５２０４２８
研究課題名（和文）　ドイツ語史における開始相表現の変化

研究課題名（英文）　Developments of the Inchoative Expressions in the History of the German Language

研究代表者
重藤　実（SHIGETO MINORU）
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：80126078

研究成果の概要（和文）：ドイツ語史における開始相表現の用例を収集し整理してみると、様々な動詞が用いられてきたことが明らかとなる。特に werden / beginnen / kommen は比較的多く用いられてきたが、gehen は開始相表現にはあまり用いられなかった。このような特徴は、言語類型として記述可能だと思われる。また werden の用法の変化などは、言語類型の変化として記述することが十分可能だと思われる。しかし言語類型の変化の理論の確立のためには、さらなる研究が必要である。

研究成果の概要（英文）：On the basis of the usage examples, it became clear that various verbs were involved in the inchoative expressions in the German history. Especially the verbs ‘werden’, ‘beginnen’ and ‘kommen’ were often used as the auxiliary verbs. But there are only few examples of the verb ‘gehen’. It seems possible to explain these facts in the framework of the linguistic typology. And it also seems possible to describe the historical change of the usage of the verb ‘werden’ as the change of the typological pattern. But the further investigations will be needed to develop a theory of typological changes of languages.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	900,000	270,000	1,170,000
２０１０年度	700,000	210,000	910,000
２０１１年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学、言語学・独語学
キーワード：ドイツ語史　アスペクト　言語類型論

１．研究開始当初の背景

（１）ドイツ語史研究においては、近年、初期新高ドイツ語期に関する研究が精力的に続けられている。それらの研究により、地域

的にもテクストの種別に関しても「多様性」が初期新高ドイツ語の特徴となっていることが明らかになっている。

（２）初期新高ドイツ語の特徴として「多様性」が明らかになったことにより、初期新高ドイツ語から現代ドイツ語への変化を言語類型の変化として説明する可能性が示されている。ドイツ語史全体を言語類型の変化として記述することも可能かもしれない。このような観点から、古高ドイツ語期・中高ドイツ語期についても、これまでの資料の蓄積や研究成果を見直す作業が進められている。

（３）文法記述のための資料として、ボン大学の初期新高ドイツ語テクストコーパスはすでに完成・公開されているが、他の時代のテクストコーパス作成も進みつつある。

２．研究の目的

（１）この研究の目的は、言語類型の例として研究が進んでいる動詞アスペクトに注目し、ドイツ語におけるアスペクト表現の変化を言語類型の変化として記述する可能性を探ることであった。

（２）ドイツ語におけるアスペクト表現にもいろいろあるが、ここでは開始相表現の用例を収集・分類し、様々な時代の開始相表現を整理して、言語類型の変化としてまとめることを目指した。

（３）このような目的のためのデータ収集作業を通じ、さまざまなフォーマットの長所・短所をも検討し、今後のデータベース作成の参考となるような提案もしたいと考えた。

３．研究の方法

（１）これまでの言語類型論研究とアスペクト研究を調査し、この研究に役立つ理論的枠組みを検討した。

（２）既存のデータベースで利用できるものを確認し、用例収集の方法を検討した。

（３）収集した用例を検討し、開始相表現の変化と言語類型との関係を検討した。

４．研究成果

（１）これまでのドイツ語に関する言語類型論研究では、アスペクトに関するものはあまり多くない。他方、スラブ諸語や日本語に関する研究では、アスペクト表現に関する言語類型論研究が多くあり、参考にすることができた。

現代ドイツ語にはアスペクト表現の種類はあまり多くないため、ドイツ語は普通非アスペクト言語に分類されている。しかし歴史的には多くのアスペクト表現が生まれており、ドイツ語も類型としてアスペクト言語に変化する可能性を持っていたと考えられる、との結論を得ることができた。

（２）現代ドイツ語のテクストデータベースは、Institut für Deutsche Sprache（ドイツ語研究所）作成の Mannheimer Korpus をはじめ数多く存在する。

一方、過去の時代のドイツ語研究のためのデータベースとしては、ボン大学作成の初期新高ドイツ語データベースがあり、これはすでにインターネット上で公開されている。このデータベースは初期新高ドイツ語の各時期・方言・テクスト種のバランスを考慮して作成されたもので、この時期のドイツ語研究にとって貴重な資料となっている。中高ドイツ語については、ボーフム大学の Klaus-Peter Wegera 教授が中心となってデータベースの作成が進められているが、未完成である。また古高ドイツ語については、フンボルト大学（ベルリン）の Karin Donhauser 教授が中心となってデータベースの作成が進められている。この古高ドイツ語データベースは、各語についての注釈付きとなっているのが特徴であり、未完成であるが、完成・公開されれば、古高ドイツ語研究が飛躍的に進むと期待される。この注釈付きデータベースのフォーマットは、開始相表現のデータ収集にもとても役に立つことが確認できた。

この研究では、上記のデータベースとともに書籍資料なども参考にしながら、古高ドイツ語では Otfrids Evangelienbuch、中高ドイツ語では Nibelungenlied、初期新高ドイツ語では Wolkenstein の Minnesang などを中心に、開始相表現のデータを集めた。

（３）収集した用例を整理してみると、以下の点が確認できた。

①造語要素を用いた開始相表現としては、弱変化動詞の一種 ên-Verben があった。これは他の名詞類から新しい動詞を作るもので、ゲルマン祖語の時代に多く見られた。たとえば

nazzên(ahd)
altên(ahd)

などの例がある。しかしこの造語法は、古高ドイツ語期以降は生産性を失ってしまった。

接辞を用いた開始相表現は古くからあり、これは現在に至るまで生産性を保っていて、各時代で多くの用例を見つけることができる。たとえば以下は古高ドイツ語(Otfrids Evangelienbuch)の例である。

Yrwachet er thoh filu frua
joh habet thaz muat sar tharzua;

②動詞 werden と他の動詞の現在分詞が結びついた開始相表現は、古くから散発的に見られた。用例は多くはないが、以下に古高ドイツ語(Otfrids Evangelienbuch)、中高ドイツ語(Nibelungenlied)、初期新高ドイツ語(Der Ring)の例を挙げる。

tho ward mund siner sar sprechanter
jâ wirt dienende vil manic wætlîcher man
Des wurdens aelleu lachent do
Und gen pharrer sprechent so

この用法は現代ドイツ語では、方言を除いて、不可能となった。

動詞 werden には、現在分詞ではなく、他の動詞の不定詞と結びついて開始相を表現することがあった。これは中高ドイツ語期後期に現れ始め、初期新高ドイツ語期に非常に多くの用例が見られる。以下は初期新高ドイツ語(Nürnberger Prosa-Äsop)の例である。

Dez ward den wirt verdriezzen, daz si daz haus also mit gifft allenthalben verunraint het,

開始相表現として動詞 werden は、ドイツ語史において長い間 beginnen と競合状態にあった。初期新高ドイツ語期には、他の動詞の不定詞と結びつく用例が増え、開始相表現として文法化される可能性があったように思われる。しかしその後この用法はドイツ語に定着することなく、現代ドイツ語ではこの用法は不可能となった。

③動詞 beginnen は、属格名詞と結びつくことで、開始相を表現することができた。以下は古高ドイツ語(Otfrids Evangelienbuch)、中高ドイツ語(Nibelungenlied)、初期新高ドイツ語(Kaufringer)の例である。

Oba es iaman bigan, thaz er widar imo wan:
scirmta imo iogilicho druhtin lioblicho
noch vant er also küenen bî den turn stân,
daz Rüedegêr des strîtes mit grôzen sorgen began
ob er darnach des beginn
und zerpricht den spiegel vein

④それ以外に heben, anheben, fangen, gefangen,kommen などの動詞も開始相表現を形成することが可能であった。しかしその用例はあまり多くはない。一方 gehen は、開始相表現としてはあまり利用されてこなかったようだ。

（4）現代ドイツ語は類型としては非アスペクト言語に分類される。しかし開始相表現の収集例から見ると、多くの表現が時代とともに生まれており、その中には開始相表現として文法化される可能性があるものもあった。実際には文法化には至らなかったわけだが、ドイツ語がアスペクト言語へと発展する可能性があったことを示しているのであり、言語類型も変化しうると考えるべきであろう。

また gehen がアスペクト表現としてはほとんど用いられなかったことは、移動表限が状態変化表現としては利用されなかったことを意味する。「する型」「なる型」の類型で考えると、ドイツ語は普通は「する型」へ分類されているようだが、ドイツ語史からの用例を検討してみると、「なる型」の特徴も持っていたことになる。「する型」「なる型」の類型も固定的なものではなく変化してきたのかもしれない。この点については、さらなる検討が必要である。

（5）この研究では開始相表現に限って用例を集めたが、今後はアスペクト表現全体の用例を広く集めることで、ドイツ語の類型的特徴をより広く確認する研究が望まれる。ドイツでは古高ドイツ語や中高ドイツ語の大規模データベースの整備も進んでいるので、これらが完成して公開されれば、より多くの研究者がこの分野に取り組むことができるようになると期待される。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計０件）

〔学会発表〕（計２件）

① Minoru Shigeto: 'werden' als Bezeichnung der Inchoativität、日本独文学会第 39 回語学ゼミナール、2011 年 8 月 29 日、コープイン京都

② Minoru Shigeto: Inchoativität und Genitiv 、日本独文学会第 38 回語学ゼミナール、2010 年 8 月 29 日、IPC 生産性国際交流センター

６．研究組織
(1)研究代表者
重藤　実　（SHIGETO MINORU）
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：80126078

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：